[PRESS　RELEASE]

2026 年 11 月 2 日

京都府公立大学法人
京都府立医科大学
KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY OF MEDICINE

人工弁のある患者の歯科処置、予防抗菌薬の処方に課題

～医科・歯科と疫学・医療情報の連携で、京都府の５万件超の医療保険データを解析～

本研究成果のポイント

○人工弁のある患者さんでは、出血を伴う歯科処置の前に感染性心内膜炎を防ぐ予防抗菌薬が推奨されますが、国内の処方実態は十分にわかっていませんでした。

○医科・歯科・疫学・医療情報が連携し、京都府の医療保険データを解析しました。人工弁のある 3,664 人に行われた 52,247 件の侵襲的歯科処置で、予防抗菌薬の処方率は抜歯 47.3%、歯石除去 5.4%、全体 9.2%でした。

○飲み薬の 38.1%が慎重な使用を要する「Watch 群」で、処置日より前の処方は 31.7%、1 日処方は 11.2%でした。医科・歯科連携、適正使用、患者さんへの情報提供の必要性が示されました。

京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学　研究生　兼　京都第二赤十字病院　呼吸器内科　医長　山本千恵、同大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学　大学院生　中川裕太、同　教授　貫井陽子、同大学　地域保健医療疫学　特任助教（産学公連携）　石田真美、同　講師　松井大輔、同　教授　高嶋直敬、同大学　歯科口腔科学　講師　大迫文重、同大学附属病院　医療情報部　部長　猪飼　宏ら研究グループは、京都府の医療保険データから、人工弁のある患者さんの歯科処置時における予防抗菌薬の処方実態を明らかにしました。

本論文は、科学雑誌『Circulation Journal』に 2026 年 10 月 31 日付けで掲載（早期公開）されましたのでお知らせします。

本研究では、2017 年５月から 2024 年３月までに、人工弁のある 3,664 人に行われた 52,247 件の侵襲的歯科処置を解析しました。処置別の処方率に加え、薬剤の種類、処方時期、処方期間、施設による違いを包括的に評価し、ガイドラインの推奨と実際の診療との間に隔たりがあることを示しました。本成果は、地域全体での医科・歯科連携、抗菌薬の適正使用、患者さんへの情報提供を進めるための基礎資料となることが期待されます。

【論文基礎情報】

掲載誌情報	雑誌名　Circulation Journal 発表媒体　■ オンライン速報版　□ ペーパー発行　□ その他 雑誌の発行元国　日本 オンライン閲覧　可 （URL）https://www.jstage.jst.go.jp/browse/circj/advpub/0/_contents/-char/ja/?from=0 掲載日　2026 年 10 月 31 日（日本時間）

論文情報	論文タイトル 英語：Antibiotic Prophylaxis During Invasive Dental Procedures in Patients with Prosthetic Heart Valves: A Cross-sectional Analysis of Japanese Claims Data （日本語：人工弁のある患者における侵襲的歯科処置時の予防抗菌薬：日本のレセプトデータを用いた横断解析） 代表著者 京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学 兼　京都第二赤十字病院　呼吸器内科　山本千恵 共同著者 京都府立医科大学大学院医学研究科　地域保健医療疫学　石田真美 京都府立医科大学附属病院　医療情報部　猪飼　宏 京都府立医科大学大学院医学研究科　歯科口腔科学　大迫文重 京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学　中川裕太 京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学　山野哲弘 京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学　稲葉　亨 京都府立医科大学大学院医学研究科　地域保健医療疫学　松井大輔 京都府立医科大学大学院医学研究科　地域保健医療疫学　高嶋直敬 京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学　貫井陽子
研究情報	研究課題名 人工弁のある患者における侵襲的歯科処置時の感染性心内膜炎予防目的の抗菌薬処方に関する観察研究 代表研究者 京都府立医科大学大学院医学研究科　分子病態感染制御・検査医学 兼　京都第二赤十字病院　呼吸器内科　山本千恵 共同研究者 共同著者と同様 資金的関与（獲得資金等） 該当なし

【論文概要】

1　研究分野の背景や問題点

感染性心内膜炎は、心臓の弁などに細菌が付着して炎症を起こす重篤な感染症です。特に人工弁のある患者さんでは発症リスクが高く、長期間の抗菌薬治療や再手術が必要となることがあります。

抜歯や歯周・口腔外科手術、歯石除去など、歯茎や歯の周囲を扱う処置では、口腔内の細菌が一時的に血液中へ入ることがあります。そのためガイドラインでは、人工弁のある患者さんが出血を伴う歯科処置を受ける際、感染性心内膜炎を防ぐための予防抗菌薬を処置前に使用することが推奨されています。

一方、実際の診療で予防抗菌薬がどの程度処方され、推奨される薬剤、時期、期間が守られているかは十分に分かっていませんでした。そこで本研究では、分子病態感染制御・検査医学、歯科口腔科学、地域保健医療疫学、医療情報部の研究者が連携し、京都府の医療保険（レセプト）データから、医科と歯科の情報を患者単位で統合して検討しました。

２　研究内容・成果の要点

本研究では、2017 年５月から 2024 年３月までの京都府の医療保険（レセプト）データを用い、人工弁のある 3,664 人に行われた 52,247 件の侵襲的歯科処置を解析しました。抜歯や歯周・口腔外科手術だけでなく、日常的に行われる歯石除去、感染した歯の根管治療、歯周病検査まで幅広く対象とし、予防抗菌薬の処方率、薬剤の種類、処方時期・期間、施設による違いを評価しました。

予防抗菌薬の処方率は処置の種類によって大きく異なり、抜歯で 47.3%、歯周・口腔外科手術 32.0%、感染した歯の根管治療 12.4%、歯周病検査 6.1%、歯石除去 5.4%で、全体では 9.2%でした（図１）。

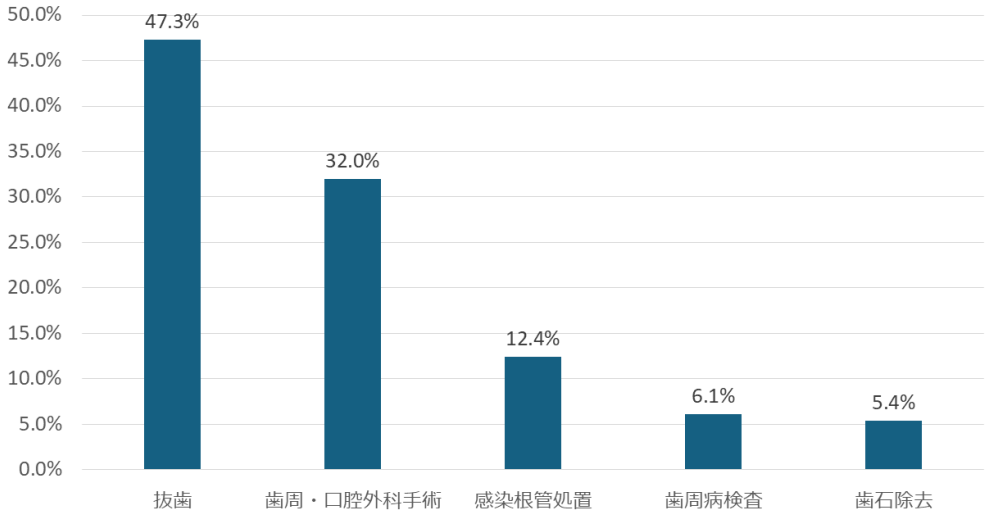


図１　歯科処置別の予防抗菌薬処方率

処方された飲み薬では、ガイドラインで第一選択とされるペニシリン系が 45.9%を占め、過去の国内報告より高い水準でした。一方、耐性菌の増加につながる可能性があり、より慎重な使用が求められる WHO の「Watch 群」（マクロライド系、フルオロキノロン系、第３世代セファロスポリン系）は 38.1%でした（図２）。

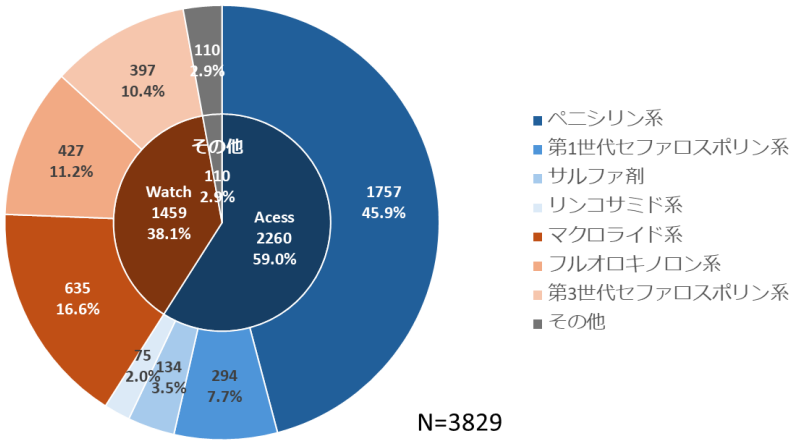


図２　処方された予防抗菌薬（飲み薬）の内訳と WHO AWaRe 分類*

*WHO（世界保健機関）の AWaRe 分類：抗菌薬を耐性化のリスクなどに応じて分類する仕組み
Access 群：一般的な感染症に対して優先的な使用が推奨される抗菌薬
Watch 群：耐性菌のリスクから、より慎重な使用が求められる抗菌薬

施設別にみると、歯科診療所では病院歯科に比べて Watch 群が選択される割合が有意に高く、薬剤選択に施設間差が認められました。
また、飲み薬が処置日より前に処方されていたのは 31.7%、処方期間が 1 日だったのは 11.2%にとどまり、処方時期と期間にも改善の余地が示されました。
なお、本研究は京都府の国民健康保険・後期高齢者医療制度のレセプトデータを用いた観察研究です。実際の服用時刻や処方目的は確認できないため、予防抗菌薬の効果や感染性心内膜炎発症との因果関係を直接検証したものではありません。

３　今後の展開と社会へのアピールポイント
本研究は、医科・歯科の臨床的な課題を、疫学・医療情報の手法で検証した分野横断的研究です。人工弁のある患者さんの感染性心内膜炎を予防するには、人工弁を管理する循環器内科・心臓血管外科と歯科が、予防抗菌薬の必要性や薬剤、処方時期・期間について情報を共有できる仕組みが重要と考えられます。
今後、医療従事者へのガイドライン周知、抗菌薬適正使用の支援、患者さんが人工弁の情報を歯科受診時に伝えやすくする取り組みなどを地域全体で進めることで、ガイドラインと実際の診療との隔たりを縮め、感染性心内膜炎のより適切な予防につながることが期待されます。

＜取材等に関すること＞
事務局企画課企画広報係
電　話：075-251-5804
E-mail：kouhou@koto.kpu-m.ac.jp